

第2章 救いの9つの面 第二 転回

はじめに

2018年6月から、みやま集会では、救いの3つの段階である「義認・聖化・栄化」を学んでいます。

救いとは、一言で言えば、人が神によって造られた本来の目的のとおり完成されることです。その完成のことを、「栄化」と言います。救いの入り口は「義認」、その入り口から入って完成に向かう途上は「聖化」、そして完成が「栄化」というわけです。

人が救いを受けるかどうかは、その救いの入り口に入るかどうかで決まります。聖書では、救いの入り口に入ることを、「神から義人であると認められる」と表現します。これを短く言ったのが、「義認」です。

では、人はどのようにしてその入り口に入るのでしょうか。また入ったらどうなるのでしょうか。聖書では9つのことを教えています。その9つのこととは、「再生、転回、信仰、悔い改め、告白、赦し、転嫁、子とされること、救われたことの確信」です。

こういうわけで、もし、あなたが伝道をしていて、救いとは何ですかと尋ねられたら、栄化のことを説明します。次に、どのようにして救いを受けるのですかと尋ねられたら、義認と9つのことを語ります。そして、救いを受けた信者はどのような生活をしたらよいのですかと尋ねられたら、聖化のことを答えるとよいのです。

聖化は、信者にとっては、その人の信仰生活そのものです。聖化は、信者になった日からこの地上の生涯を終える日、つまり、肉体の死を迎える日まで続きます。信仰生活においては、神のことばを学び、それを祈りつつ実行していくことがとても大切です。聖書のことばの中で、どの部分が新約時代の信者にとって指針となるのか、そのことも学んでおくと有益です。

そこで、みやま集会での学びの内容と順序を次のようにしています。全部で5章です。

1. 救いとは何か＝人が神によって造られた本来の目的のとおり完成されること＝栄化
2. どのようにして救いを受けるのか、受けたらどうなるのか＝救いの9つの面
3. 救いの入り口に入ること＝「義人と認められる」＝義認
4. 信者は「義人と認められた」けれども、その人の内側には「罪の性質」は残ったままである。その人の内側が神の子にふさわしく実際に変えられていくプロセス＝聖化
5. 新約時代の信仰生活における指針とは

本日は、「第2章 救いの9つの面 第二 転回」です。

救いの9つの面 第二 転回

転回について、次のアウトラインで学びます。

1. 転回の意味
2. 転回の4つのタイプ【民族的転回・一時的転回・真の転回・繰り返される転回】
3. 転回的手段
4. 転回における神と人との関係
5. 真の転回の実例

1. 転回の意味

(1) 転回とは

- ① 神のわざである
- ② 罪の性質に縛られていた人が、意識的にその生き方を神の方に向けるようになる
- ③ 人の側には、神への信仰と今までの生き方についての悔い改めが伴う

(2) 再生との関係

- ① まず「再生」が起きる。再生は瞬間的な神のわざであり、人の側には「生まれた」という意識はない。
- ② 再生に続いて、次に「転回」が起きる。これも神のわざであるが、人の側には「向きを変える」という意識がある。
- ③ 再生された信者は、神への信仰と今までの生き方についての悔い改めをもって、意識的に神の方に向きを変えるようになる。これが転回である。

(3) 聖書の用語

- ① 新約聖書では、「立ち返る^ギエピステレフォウ」という用語が使われている
- ② その基本的な意味は、英語で「turn ターン」＝「向きを変える」。罪から神の方へと向きを変えることである。
 - 「罪から」＝罪の性質に従う生き方から・・・ここには悔い改めが伴う
 - 「神の方へと向きを変える」・・・ここには神への信頼、信仰が伴う

(4) 転回には次の3つのステップが必要

- ① メシアがどういうお方か、メシアは何をしたのか、といったメシアについての基本的な事実を聞いて理解すること。すなわち、メシアは私たちの罪のために死んでくださった、そして葬られた、そして復活したという事実を聞いて理解すること。
- ② 単なる知識として理解するのではなく、そのことに心から同意すること。
- ③ この心からの同意は、メシアに信頼して自己存在のすべてをゆだねることにつながる。

- (5) 転回は次の3つの要素から成る、とも言える
- ① 知識：何から何へと向きを変えるべきかを知る
 - ② 同意：メシアについての事実について、それを真実であると同意する
 - ③ 信頼：実際に信頼する、信じる。
- (6) 聖書が「転回」について語るとき、次の二つのことが起きている。
- ① 罪から向きを変えること、すなわち悔い改め
 - ② 神の方へ向きを変えること、すなわち神への信頼、信仰
- (7) 聖書箇所
- ① 使徒 9：31～35・・・「主に立ち返った」(35節)
 - ② 使徒 11：19～26・・・「主の御手が彼らとともにあったので、大勢の人が信じて主に立ち返った」(21節)
 - ③ 使徒 15：19・・・「神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけない」
 - ④ 使徒 26：20・・・「悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです」
 - ⑤ Iペテ 2：25・・・「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです」

2. 転回の4つのタイプ

(1) 民族的な転回

- ① ニネベの民(ヨナ3：10)「彼らが悪の道から立ち返るために努力している」
- ② イスラエル民族(ロマ11：24～26)・・・「ヤコブから不敬虔を取り払う」ギアポストレフオウ、英turn away」(26節)

(2) 一時的な転回・・・これは見せかけの転回である。3つの要素のうち、2つ、知識と同意はあったが、3つ目の信頼がない。これは本当の転回ではない。このような人は、まだ再生を経験していない、すなわち救われていない人である。そのような実例として聖書が記している可能性がある箇所は、次の3つ。

- ① 魔術師シモン(使徒8：9～24)・・・21節と23節を見ると、シモンは真の信者ではない
- ② 偽教師(Iテモ1：5～20、IIテモ2：16～18)
 - 偽教師は信者ではない。
 - しかし、そのまわりには、偽教師の教えに惑わされて正しい信仰生活から離れていく信者もいる。そのような信者については、「ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました」(Iテモ1：19)と言われる。信仰の破船に会った信者は、もはや信者ではないように見えるが、一度救われた信者は永遠のいのちを失うことはない。
 - 偽教師についてしまった人々には、2種類の人々がいる。一方は、一時的な転回だった人々、彼らはもともと救われていなくて、見せかけ

の転回をただけの人たち。他方は、救われていたけれども信仰の破船に会ってしまった信者たち。前者は永遠のいのちを受けていない。後者は永遠のいのちを持っていて、失われることはない。

- Iテモ 1:20 の「ヒメナオとアレキサンデル」は、どちらか？
 - ヒメナオはIIテモ 2:17 で偽教師の「仲間」とされている。
 - アレキサンデルはIIテモ 4:14~15 で、「銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられます。あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです」とされている。
 - Iテモ 1:20 でパウロは「私は、彼らをサタンに引き渡しました」とある。これは信者であることを示すと考えられる(参考、Iコリ 5:5)。
 - よって、ヒメナオとアレキサンデルは、偽教師そのものではなく、偽教師の仲間であり、信仰の破船に会ってしまった信者である。

- ③ デマス (IIテモ 4:10) 「デマスは今の世を愛し、私を捨てて」・・・コロ 4:14 では、パウロはデマスについて、「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています」と記していた。デマスが一時的な転回をただけの人であったのか、それとも救われた信者で信仰の破船に会ったのか、それは定かではない。

- (3) 真の転回・・・3つの要素「知識、同意、信頼」のすべてを備えている。救われて再生した結果として起きることである。

(4) 繰り返される転回

- ① これは、一見すると、信者がいったん救いを失ったあと、再び信仰を取り戻して救いを受けなおしているかのように見える。
- ② しかし、聖書は、信者がいったん救われたら、その救いを失うことはできないと教えている。
- ③ 転回が繰り返されているかのように見える状況は、再生された信者が「信仰の後退」を経験して、そこからまた新たに力を受けて立ち直っていくときである。
- ④ 「信仰の後退」のときだけに限らず、信者は、日々新しくされるべきものである(コロ 3:10、IIコリ 3:16~18、エペ 3:16、ピリ 1:6)
- ⑤ 「新たに力を受けて立ち直る」あるいは「日々新たにされる」、いずれにしても、信者が日々、悔い改めと神への信頼の上に、さらに神の方を向いて歩もうとすること、それを「繰り返される転回」と呼ぶのであれば、それ自体は間違いではない。しかし、「日々新しくされる」ことは「聖化」である。「転回」とは区別する方がよい。

3. 転回的手段

- (1) 神のわざである。転回のをぎを行うことのできるのは神のみである（エレ 13:23、ヨハ 1:13、ロマ 9:16）
- (2) 転回のをぎを発動するのは、神のみこころである。
 - ① 転回のをぎ I コリ 6:9~11
 - ② 神のみこころ エペ 2:3~6
- (3) 転回のをぎを、神は「神のことば」を用いて行う
 - ① 信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストのことば（レーマ）による
ロマ 10:17
 - ② 「神のことば」を運ぶのは神のしもべ I コリ 3:5
 - ③ 信仰について聞いた ガラ 3:2

4. 転回における神と人の関係

- (1) 転回を行うのは、神である。表現を変えれば、転回のシナリオを描くのは、神である（使徒 11:18「神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになった」、II テモ 2:25「神は彼らに悔い改めの心を与えて」）
- (2) 人は、神のわざに協力しなければならない。罪から神の方へ向きを変えるのは、その人自身である。
 - ① イザ 55:7「悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ」
 - ② エレ 18:11「おのおの悪の道から立ち返り、あなたがたの行いとわざとを改めよ」
 - ③ 使徒 17:30「今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられる」
- (3) 人は、その思考（知性）、心（感情）、意志を働かせなければならない。
 - ① 思考（知性）において、見方、考え方を変えなければならない
 - ロマ 3:20「律法を行うことによっては、だれひとり神の前に義と認められない」
 - ② 心（感情）において、神への恐れを覚える、そして自分が罪の性質に従ってきたことについて、悲しみを感じる
 - II コリ 7:9~10「あなたがたが悲しんで悔い改めた」
 - ③ 意志において、選択、決断、人生の目的を変えなければならない
 - 使徒 2:38「悔い改めなさい」
 - ロマ 2:4「神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか」
- (4) 詩 119:59~60 次の3つのことを教えている
 - ① 「私は、自分の道を顧みて」＝転回の準備・・・自分の道をいくのか、神の道をいくのか、注意深く内省する

- ② 「あなたのさとしの方へ私の足を向けました」＝転回の実行・・・聖書が証しするお方、メシアに向かって、自分の向きを変える
- ③ 「私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました」＝転回の実証・・・神に従うということは転回的手段ではない。それは転回したことの証明として、自ずと外側に出てくるものである。

5. 真の転回の実例

- (1) パウロ（使徒 9：1～28）
- (2) ルデヤ（使徒 16：13～15）
- (3) ピリピの看守（使徒 16：19～34）